

# 根室海峡に來遊するトドの食性とその年変化

○後藤陽子（釧路水試）・服部薫（日本エヌ・ユー・エス(株)）・高山琢馬（北大院水）・山村織生（北水研）・鳥澤雅（釧路水試）  
キーワード：トド・食性・根室海峡

## 目的

北海道根室海峡羅臼海域に來遊するトド *Eumetopias jubatus* の食性は、1994 年より継続的に調査が行われており、スケトウダラ *Theragra chalcogramma* を主とするタラ科魚類が餌生物として重要であることが明らかにされている。また、その餌生物組成は季節や年によって異なっており、トドは餌生物環境に応じて、機会的な捕食を行っていると考えられている。したがって、トドの食性については、モニタリング的に動向を調査し続けることが重要である。本研究では、根室海峡に來遊するトドの最近の食性について明らかにするとともに、過去の知見との比較を行った。

## 材料および方法

2005 年 1 月に、北海道根室海峡羅臼海域において採捕されたトド 7 個体から、胃内容物を収集し、分析に供した。胃内容物中の魚類、魚類骨格、頭足類および頭足類口器から、餌生物を可能な限り種まで同定した。さらに、餌生物種毎に出現頻度（F%：餌生物種が出現した胃数/空胃を除く全胃数 $\times 10^2$ ）および重量割合（W%：餌生物重量/生物重量の計 $\times 10^2$ ）を求め、これらから餌生物種の重要度順位（CRI）を算出した。

## 結果

試料 7 個体のうち、空胃は 1 個体であった。胃内容物分析の結果、ボラ *Mugil cephalus*、タラ科魚類、カレイ科魚類、イカナゴ属魚類、オニカジカ *Enophrys dicerca* およびドスイカ *Berryteuthis magister* が餌生物として同定された。

ボラは、痕跡のみが残存していた 1 個体を除く 5 個体から出現しており、出現頻度（83.3%）および重量割合（94.7%）ともに最も高い値を示していた。ついでドスイカが多く摂餌されていた（F%：50.0%）。

タラ科魚類については、スケトウダラの出現頻度が 50%と高かったものの、重量割合は 1%未満と低かった。したがって、本研究において、ボラおよびドスイカがトドの主要餌生物となっていたことが明らかとなった。

## 考察

これまでの調査結果から、羅臼海域に來遊したトドの餌生物組成は、季節や年によって異なることが示されてきたが、タラ科魚類が常に主要餌生物であった。しかし、本結果では、タラ科魚類の摂餌は認められるものの、重量割合が低いことから、重要性は低いことが示された。また、ボラについてはこれまで捕食の報告はなかった。

1990 年代に当海域のスケトウダラ資源量が減少して以来、近年まで、その資源水準は低位で推移していると考えられている。1990 年代における調査結果においても、スケトウダラの資源量が少ないか、分布密度の低い時期には、他の捕食しやすい餌生物を主要餌生物としていたことが明らかとなっている。したがって、本研究においてみられたトドの主要餌生物の変化は、餌生物環境の変化によって生じたと推察された。